

「教育課程論」通信

vol.06

2コマの流れと記録

「多様化」といっても学校をとりまく多様化だけでも実に様々で、子どもの多様化ひとつとっても、特別な支援が必要な子どもに限らず、性の多様性やギフテッドの子どもなどがあげられます。そのなかでも今回は大学の教育課程においてもなかなか取り上げられる機会がない「外国につながる子ども」にフォーカスをあてました。早速ですが、日本語指導が必要な子どもたちの母語第4位は「日本語」でした。なぜでしょう？

資料や数値をもとに背景などを推測し、疑問や自身の気づきをもったまま、さらに実際に迫るため日本語教室の授業を参観しました(リアルタイム配信)。参観中もコメントスクリーンを活用して、授業の気づきや疑問を投影しながら子どもと教師の姿をみました。たとえば「生徒の意識的には『日本語の勉強』と『日本史の勉強』のどちらの方が強いのか?」という疑問や「教師の介入が少ない」など色々投影されました。

その後、概念的に学びの整理をしていながら、授業とカリキュラムを考えていきました。最後に、「外国につながる子ども」もいる「教室・学校」で多様な文化や言語が包摂される取り組みのアイデアを出し合いました。明日できる短期のものから、学校全体や長期的に取り組むものから様々で、学級経営的視点だと「支援を必要とする子供たち以外の子供たちの教育を充実させる。支援を必要とする子供たちを助け合えるように多数派の子供を指導する」など、日本語取り出し教室との連携的視点だと、「日本語取り出し教室で学んだ日本語を用いて、簡単に自分の国について紹介する」など豊富なアイデアがあげられていました。



連載 みんなで力をつくる学校 | 外国につながる子どもも、みんなも、伸びていくことを目指して

(<https://www.kyoikushuppan.co.jp/line/library/topics/2023/cooperati>
on/co-index.html)

日本語適応指導教室の授業を見学して

(参考) 岩倉市日本語適応指導教室のホームページ
<http://www.iwakura.ed.jp/nihongo/frame.htm>

今日の授業見学で前にあった教室掲示の考え方「仲間に助けを求めろ」「分かったふりをしない」「さりげなく助ける」「見捨てない」は、外国人児童だけでなく、他の少数派の子どもたちでも応用できる考え方だと感じた。周囲に気兼ねなく助けを求められる雰囲気、また、当たり前のように困っている人にてを差し伸べられる人を育てていくことが多様性を認め包摂していくことに繋がると考えた。

実際に、日本語教室を見学する機会はありませんでしたがとても貴重な経験になりました。まだ数年しか日本語を学んでいない児童たちの言語能力にとっても驚かされました。また、日本語を使っただけのディスカッションが多く、児童の長所を生かしたディスカッションになるような教員側の声掛けができていて感じました。他者にはない自身のいいところをのびさせる個性を生かす授業形態で、児童の興味・関心を引き出すことができていたのだと感じました。

外国につながる子どもだけでなく特に特別な支援を必要とする子どもと関わる時に命題22の考え方が重要だと思った。そのような子どもたちについて考えるとき、どうしてもできないことや困難さをどうやって支援しようか、どうやったらできるようになるかということばかり考えてしまう。もちろん必要な支援を考えて提供することは重要だが、その子を持っているよさを認めることでその子自身の可能性を広げることができると包摂することができるのではないかと考えた。中村先生も日本語に難しさはあるがムードメーカーだとか司会が得意だとか、全員の良いところを書かれていた。行事を企画するときもそれぞれのよさが発揮できるようなものを考えたい。

多様な子どもを包摂するには授業以外の場面も大切である。教室に置く本や掲示物の中にその国について書かれたものを混ぜることで子どもたちはお互いの国の言語や文化について理解することができ、多様な子どもを包摂出来るのではないかと考えた。また、掲示物などみんなが見るものには英語や特有の言語で訳をすることで自然と互いの言語に触れることが出来るのではないかと考えた。外国人児童を日本に適応させることを目指すのではなく、日本人児童も外国人児童に寄り添い互いに理解し合うということを重要視することでどちらの立場の児童も過ごしやすいう空間を作ることが出来るのではないかと考えた。

命題24から、言語表現に加えて言語以外の方法で表現する授業方法を用いることで、言語能力の高い低いに関わらず、自分の思っていることや意見を表明できるのではないかと考えた。言語以外の方法について具体的には、絵やジェスチャーなどが挙げられる。命題22から、子どもの意見は貴重なものであり無力ではないため、言語として十分に表現できない児童に別の方法を提供することで言語活動のハードルを下げるのが大切であると思う。

特支所属の人たちの多くは、特別支援教育の視点から分析したり、特別支援教育に応用するとしたら…という視点で考えていました！特に「授業」での取り組みだけでなく、風土や文化として根付かせるために「学級、地域、家庭」などでできることも具体的な取り組み案を交えて提案されています！貴重な機会を頂いた愛知県岩倉市の中村夏帆先生、大変ありがとうございました！



編集後記

今回はテーマに対して皆で共通理解をした後は、個々での「静の学び」の要素が強かったと思います。クラスの他の人がどんなことを考えているかみえにくくなりがち(今回はコメントスクリーンに助られました)が、50分の授業をみて個人でどれだけ思考を巡らせたか、ふりがえリシートを開けばそこが輝いていました。覗いてみてください。覗くと「できなさ思考」「言語教育」などの視点や「評価」「教師の働き」の難しさもふりがえりにはできており、そのヒントや整理をするために参考にできる連載記事を見つけましたので、共有します!!!!

[制作・編集 馬越々椰(教育課程論TA)]

南浦先生の今日のひとこと

限られた時間の中でたくさんの視点を提供してしまったため、馬越さんの言うように後半は「静の学び」が多くて僕も反省笑。もしもっと学びたい人は、実はターム1で今年から第1類向けに開講した「外国人児童・生徒の教育」を是非また卒業までに受けてみてください！マイノリティの子どもたちの支援と、「学力向上のための教育」とを分断しない私たちがいたいですね。